

特別寄稿文 〈信仰手記〉

真のお母様の時代に生きる

ユダヤ・キリスト教の伝統との対比の中で考える

文責・梅本憲二（777双）

「真の父母様宣布文ウェブサイト」に掲載された、梅本憲二氏の特別寄稿文〈信仰手記〉の要点を抜粋・要約して紹介します。詳細は、「宣布文ウェブサイト」（2023年8月24日投稿記事。左にコード）をお読みください。なお、真の父母様のみ言や「原理講論」の引用は、「青い字」で表記してあります。

教理研究院

「宣布文ウェブサイト」の投稿記事（全文）はこちらから↓



はじめに

昨今の統一運動の内外的状況は、大きな摂理的峠を越えゆく時であることを示している。この重要局面を勝利的に越えうるか否かは、真のお母様と一つになって歩みうるか、否かにかかっていると見える。

しかし、一方では、すでに始まっている「真のお母様の時代」に乗り切れない人たちもいるよ

うに見える。このような状況も踏まえ、いま一度、「真のお母様の時代」に生きる意味を考えたみたい。

なお、これは私個人の信仰告白的内容であり、「家庭連合」の公式見解ではないことを断っておきたい。

「真のお母様の時代」の到来

真のお父様の聖和とともに

新正統主義神学である。

その考え方によれば、聖書の言葉は、神の啓示ではなく、神の啓示に遭遇した人間の証言である。そこには、人間的な要素や主観が混入するのは当然である。それらの証言を通して（越えて）、神の啓示そのものに出

合わなければならない。では、神の啓示そのものとは何かといえば、イエス・キリストである。それは、「わたしを見た者は、父を見たのである」（ヨハネ一四・9）という聖句に要約されているものである、というのである。

その結果、大混乱の中にあつたキリスト教は、一気に活路を見いだし、再臨時代を迎える基盤が整えられたのであつた。

啓示の本体は

「言葉」（文字）ではなく「実体」すなわち、それまで、聖書の言葉こそ神の啓示（絶対的な真理）であると思われていたが、

「真のお母様の時代」が始まった。お父様の後継問題に関するみ言は以下のとおりである。

「先生が霊界に行くようになればお母様が責任を持つのです」（マルスム選集（以下、「選集」）318―260）

「これからは先生がいなくても、お母様一人のみ旨に何の支障もないのです。……先生が一人でいても真の父母様の代身であり、お母様が一人でいても真の父母様の代身です」（同201―126）

「お母様を中心として皆さんが一体になっていかなければならない時が来ました。もう先生がいなくても、お母様が代わりにできる特権を許諾したということです。お父様がいなるときは、お母様のことを思わなければなりません。……先生の代わりにお母様に侍る心を持ち、祈禱もそのようにするのです。今までは先生を愛してきましたが、これからはお母様を愛さなければ

なりません。これからはお母様の時代に入っていくことを理解して……」（同265―310）

「先生よりも、お母様をもつと重要視できる統一教会員になれば福を受けるといのです」（同220―236）

併せて、真のお父様の後継が真のお母様であることを宣布された「顧命性宣誓宣布」式も考慮すべきである（『人類の涙をぬぐう平和の母』220ページ）。

異なる啓示内容を克服する道

十八世紀の啓蒙時代に入り、聖書を理性的に検証する動きが出てきた。それが聖書批評学である。その結果、それまで神の言（啓示）とされてきた聖書の中に、多くの矛盾が指摘されるようになった。そして、聖書の権威は地に落ち、当時のキリスト教は大混乱に陥った。この危機を救ったのが、二十世紀初頭に出現したバルトに代表される

その聖書の信頼性が失われ、大混乱に陥っていたキリスト教に、啓示の本体は「言葉」（聖書・文字）ではなく、「実体」（キリスト）であるという、コペルニクスの転回とも言える啓示理解の道を示したのが、新正統主義神学であつた。

このような新正統主義神学が提示した啓示理解の道は、今日、ともすれば言葉にとらわれがちな我々にも、有用な示唆を与えらるものと言えらる。

以下のみ言や『原理講論』の記述にも、それに近い啓示理解の道が示されている。

「み言が先でしょうか、実体が先でしょうか。……統一教会では、み言が先ではありません。実体があつて、その実体が行つた事実のみ言で証するので、内外が一致し得る内容を知ることができるといのです」（『真の父母経』13・1・5・5）

「真理とは何であり、真理の根本とは何でしょうか。……一

人の男性と一人の女性以外にはないのです。全世界の男性を代表する真の男性がいれば、その真の男性の四肢五体が真理です。真理は文字ではありません。真の男性と真の女性が真理なのです。……真の愛をもつた真理体である真の真理の夫婦が一つになるとき、真の真理の殿堂になるのです」（選集182―81）

「イエスは、そのみ言を真理と言わないで、彼自身がすなわち、道であり、真理であり、命であると言われたのであつた（ヨハネ一四・6）」（『原理講論』169ページ）

真の愛により一つになった「真の夫婦」が真理であるとするならば、勝利された「真の父母」こそ啓示の実体であり、絶対的な真理の基準であるということになる。

ただ、真理は実体であつても、一義的には、それを証しするみ言を通して真理を知りうるものである。それゆえ、実体のみ言は

内外一体の関係であつて、共に一体として尊ばなければならない。

「宇宙の中心核」としての「真の父母」

勝利された「真の父母」という実体は、絶対的な真理の基準であるが、同時に「宇宙の中心核」的存在であることは以下のみ言から分かる。

「この地上に顕現した真の父母は、宇宙の中心を決定する中心ポイントです。歴史はここから実を結び、ここから收拾され、ここから出発するのです。……世界がここで一つの世界に收拾されるのであり……新しい天国が成就されるのです」（選集44―132）

「宇宙の中心になる核と柱である天地父母、真の父母……地上と天上における一心一体となつた実体の一つの中心、一つの核と一つの柱を中心として、永続的な天国理想を拡大

し、守っていくことを願います」(『真の父母経』5・4・4・33)

すなわち、真の父母という実体(存在)は、宇宙における啓示の本体、真理の基準であるとともに、宇宙の唯一の中心ポイント、中心核的存在であって、人類は、この真の父母という絶対的価値を持つ中心核的存在を得て、初めて一つになれる道、平和と幸福に至る道を歩み始めることができるというのである。

真の父母の「最終一体」と「定着」および「定着実体み言宣布大会」

では真の父母は、いつ最終的に勝利され、宇宙の絶対的な真理の基準、中心核的存在となられたのであろうか。

それは、米国・ラスベガスで二〇一〇年六月十九日と同年六月二十六日の両日をもってなされた、「真の父母様最終一体完成・完結・完了宣布」に関する

以下のみ言を通して知ることができる。

「二〇一〇年……両日にかけて……特別宣布が行われまし。……既に真の父母様御夫妻は、最終一体を成し遂げ、完成、完結、完了の基準で、全体、全般、全権、全能の時代を奉獻宣布されたのです」(天一国経典『天聖經』13・4・3・1)

ここでの「最終一体」とは、最終的に、それゆえに、永遠に、一体となられたということであり、その後、いかなることであっても両者は離れることなく、その組み合わせの変更もないということである。

それゆえ、その直後から真のお父様は、真の父母が実体として定着された」と語られ、真の父母の「実体定着」と、そこから発せられる「総括的み言」を宣布する「天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会」が、全世界的な規模で実施された。以下は、この宣布大会について

の真のお父様のみ言である。「天地人真の父母が定着しました。そのため、実体み言を宣布しなければなりません。真理の実体、定着した実体が語る言葉が、宇宙を解放できるのです。それが実体み言宣布です。天地人真の父母が定着したということです」(『真の父母経』13・1・5・7)

まさしくこの宣布大会は、真の父母様の最終的な勝利とみ言を宣布する大会であったのである。その後、真のお父様は、二〇一二年四月十四日、ラスベガスでの宣布大会の最終的な完結を宣布する「特別宣布式」(『トゥデイズ・ワールドジャーナル』2012年天曆4月号19ページ)を挙行し、一連の大会を締めくくられた。

そして、同年八月十三日、真の父母様の最終的な勝利を意味する「すべて成し遂げました」という祈りをもって生涯を締め

くくられ、同年九月三日に聖和された。

勝利(定着)された真の父母と「天一国」

「定着実体み言宣布大会」は、真の父母の最終的勝利とみ言を宣布する大会であったが、人類にとつては、初めて一つになれる平和の道、絶対、唯一、不変、永遠なる中心核的存在を得たことを意味するものでもあった。その意味するところはあまりにも大きい。

事実、この一連の大会の最終完結を宣布された翌年、二〇一三年天曆一月十三日、基元節を期して「天一国」の実体的出發がなされたのであった。

このように「天一国」は、絶対的な中心核となられた真の父母様を中心として出發したのであるから、今後いかなることがあっても、絶対、唯一、不変、永遠的な輝きをもって存続していくことであろう。

「真のお母様の時代」に生きる

真のお父様の聖和とともに「真のお母様の時代」が始まった。

真のお母様は、三年間の侍墓生活の後、「行く道がどれほど困難でも、私の代で復帰摂理を終わらせませう」(『人類の涙をぬぐう平和の母』114ページ)との決意のもと、復帰摂理の最前線に立ち、奇跡的な働きをされている。また、私と一つになつてほしい。そこに勝利の道があるのです」と何度も語られている。

では、真のお母様と一つになるとは、どのようなことを言うのであろうか。それは、私たちが真のお父様を愛していたのと同じ基準でお母様を愛するということである。なぜならお母様は、お父様と同じ価値を持っておられるからである。それは以下のみ言から理解できる。

「神様が完全な神様であれば、

アダムとエバは半分の神様です。アダムも半分の神様、エバも半分の神様です」(天一国経典『天聖經』4・1・1・12)

「天一国」は天地人真の父母様を中心とした「心情一体の世界」

真のお母様と一つになつて生きる」とは、どのような生きざまであるか。それは結局、真の父母様への「孝情」「孝」の問題となつてくる。ここに、その一つのヒントとなるみ言がある。

「孝子になろうとすれば、父母の心の方向と常に一致していなければなりません。孝子の道を行く人は、父母とかけ離れた行動をする人ではありません。父母が東に行けば東に行かなければならず、父母が西に行けば西に行かなければなりません。行く目的を提示したのちに、行く途中で回れ右をすれば、一緒に回れ右しなければなりません。そこに異議があつてはなりません。

ません。十度行き、十度回れ右をしたとしても、また回れ右して従つていかなければなりません。反抗すれば、孝子の道理を最後まで守ることはできません」(選集62-32)

ここでは、「ただ盲目的に親に従つていけばいい」と言われているわけではない。一つのぎりぎりの状況下での子としての態度が問われているのである。そこでは、常識的な判断は通用しない。その場を決するのは「情」の世界である。一つの限

界的状況下で、なお、子としての親に対する道理、切つても切れない愛と信頼の情を残しているかどうか問われているのである。

真のお父様はよく、終わりの日は「み言」と「人格」と「心情」の三つの審判があると言われた(天一国経典『天聖經』4・3・3・9)。また、「終わりの日には、宗教は心情宗教、哲学は心情哲学、主義は心情主義、思想

は心情思想で各々解明されねばならない」(『御旨の道』282ページ)とも語っておられる。み言を学び、それにふさわしい人格を形成した基台の上で、本然的な「心情基準」を立てることが、信仰者一人一人の最終的目標なのである。

それは、天地人真の父母様への「孝」の心情(孝情)を立てることから始められなければならない——りっぱな信仰生活をされてきた人でも、最後の心情(孝情)の審判(試練)を超えられず、道を踏み外される人がいることは、残念なことである。そこから横的に心情が展開され、天地人真の父母様を中心とした全人類一大家族の心情一体世界「天一国」が形成されるのである。

そして、そこに至る最初の一歩は、真の父母様を代身して歩まれる真のお母様(実体聖霊、独り娘)と一つになることから始まるのである。